

世界的な穀物需要の増加やエネルギー価格の上昇、ロシアによるウクライナ侵攻などの影響により、化学肥料の原料の国際価格が大幅に上昇しています。これら原料のほとんどを輸入に頼る日本では、2021年以降、肥料価格の上昇によって農業が大きな打撃を受けています。そんな中、造園・土木会社であるワコーグリーン（南区磯部）は、有機堆肥・土壌改良剤「森の富植土」を製造販売しています。利用する農家からは「収量が増え、甘い作物ができる」という声が後を絶たないそうです。同社は「神奈川がんばる企業2022」にも認定されました。がんばる企業が生み出した製品は一体どのようなものなのでしょうか。

■天然成分100%のミネラル液との出会い

同社は公園や配電線の支障になる樹木の伐採や剪定を行う造園業をメインに行っています。これらの作業の中で最も頭を悩ませていたのが、伐採木や剪定枝の廃棄処分費用。年間1000万円に達し、高額化が課題となっていました。

そこで、かねてより環境問題に興味のあった柳谷和幸社長が出会ったのが、天然成分のミネラル液。伐採木や剪定枝をチップ状にして、この特殊なミネラル液を加え、約4カ月の間、攪拌・発酵させると土壌改良材になることが分かりました。

「土中の保肥性、保水性、通気性が高まり、土壌微生物のバランスが改善します。県内の農業高校に大根やキャベツを使って栽培実験をしてもらったところ、生育が早いだけでなく、味もよいことが分かりました」と、柳谷社長はうれしそうに語ります。

■震災が教えてくれたこと

2009年に製品化。その2年後に東日本大震災が発生しました。「被災した農家の皆さんの役に立てるなら…」と、「森の富植土」を無料で提供することに。

アイデアとチャレンジで循環型社会に貢献する

(株)ワコーグリーン
代表取締役 **柳谷 和幸**さん

「これまで正直、自社のもつけのみを考えていましたが、東日本大震災は従来の企業としてのあり方に転機をもたらしました」（柳谷社長）。

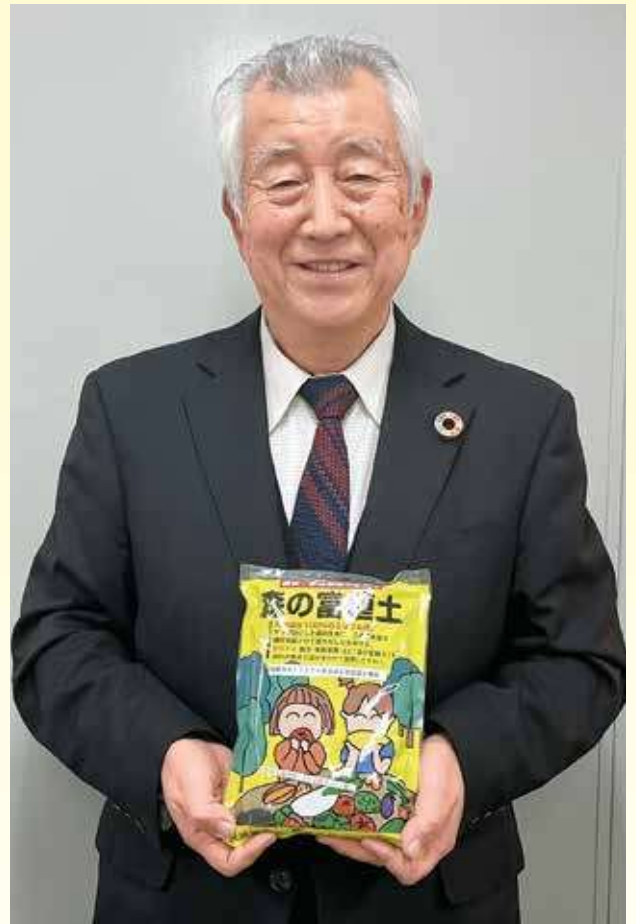
津波被害を受けた塩害農地の改良にも有効で、収穫量が倍になったと被災地の農家さんからもよるこばれました。

現在も年1〜2回、10トトラック1台と4トトラック1台で運び続けていま

す。より多くの人たちに「森の富植土」を届けたいと力が入ります。

■つねに楽しいと思うことにチャレンジ

「森の富植土は、廃棄物処理のコスト減への糸口となっただけでなく、今話題のSDGsに先駆けて、造園→廃棄物処理→有機堆肥製造・販売という同社独自のエコサイクルへの道筋につなげること



もできました。

より本格化させるために、20年には一般廃棄物収集運搬許可を取得し、他の造園業者から伐採木や剪定枝を回収しています。

最近では、神奈川県内のベンチャー企業や弁当製造業者とともに、植物由来の弁当容器を回収→堆肥化→農作物の生産に役立てる…という循環を目指すべく、動き始めました。また、馬糞や鶏糞、下水処理で出る汚泥など新たな素材から有機堆肥をつくることも模索中です。

インタビュー中も頭の中は未来を見据えたアイデアで一杯の柳谷社長。「同じ人生、楽しまない」という言葉を笑顔で残してくれました。